

# イラン人来日の背景と経緯

## ——出稼ぎイラン人の軌跡・渡日編——

稲葉 奈々子・樋口 直人

### 1. 問題の所在

「外国人」「麻薬」「テレホンカード」というと、「イラン人」が連想されるほど、滞日イラン人にはある種のステレオタイプがついてまわる<sup>(1)</sup>。「上野公園での寝泊り」「代々木公園でのバザール」「刑務所脱走」「一本いっとく?のハニホー・ヘニハー」など、マスコミネタになるような話題にも事欠かない<sup>(2)</sup>。その一方で、「後発ニューカマー」としての不利な立場が強調され、他の国籍集団より賃金も低く(稲上 1992; 倉 1995b)、景気後退の影響をもっとも直接的に被る存在ともされてきた(倉 1995a; 筑波大学社会学研究室 1994)。

こうした性格付けがなされるがゆえに、滞日イラン人に関わる研究は比較的多い<sup>(3)</sup>。特に、筑波大学による90年代前半の就労状況の調査と、山岸らによる帰還移民の調査は、本稿の課題と大いに関連がある。しかし、これらの調査は渡日・滞日・離日のうち特定の局面にしか焦点を当てていない。我々の研究は、国際労働力移動の一事例としてイラン人の出稼ぎを捉える。そして上記3局面をトータルに描き出すことにより、イランと日本の双方に目を向けた出稼ぎの分析を行いたい。本稿の目的は、調査データの開示とアウトラインの提示を行うことにあるが、紙幅の都合により渡日局面に限定することをお断りしておく<sup>(4)</sup>。

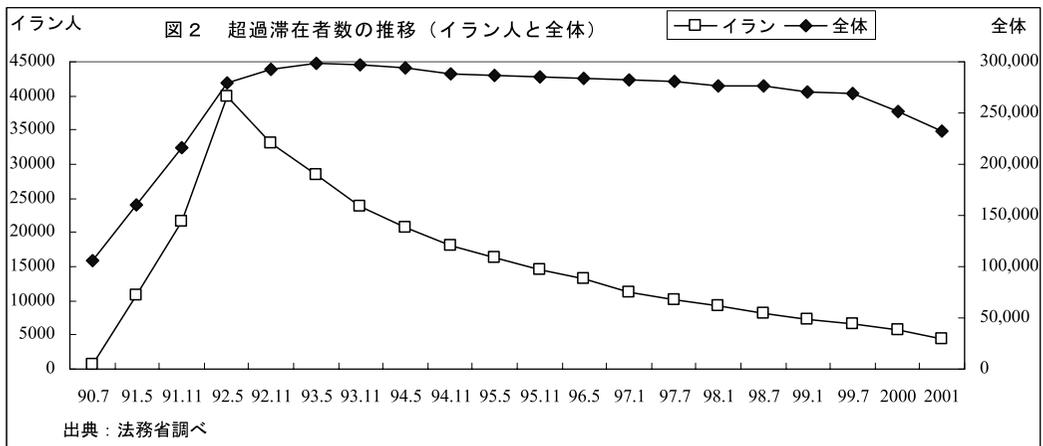
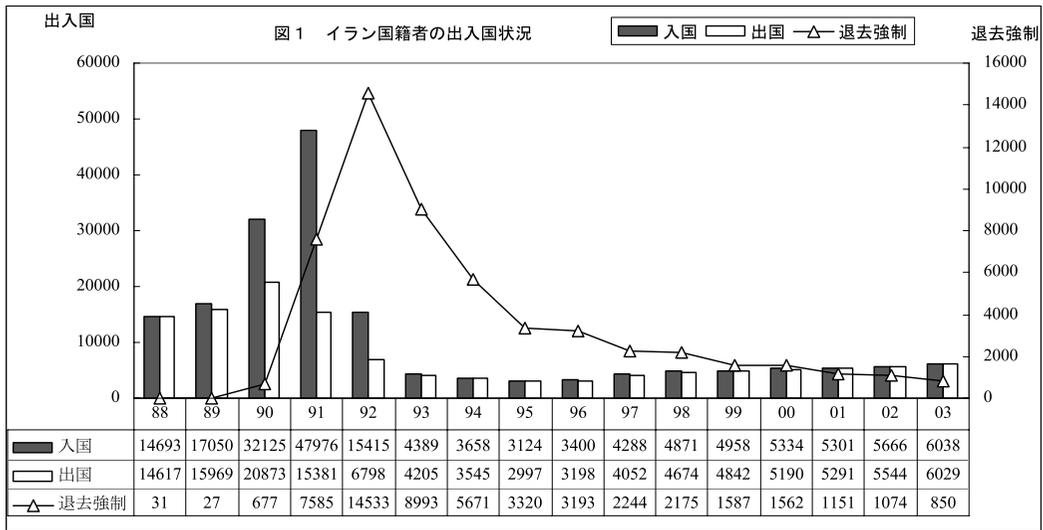
### 2. イランから日本へ出稼ぎの概要

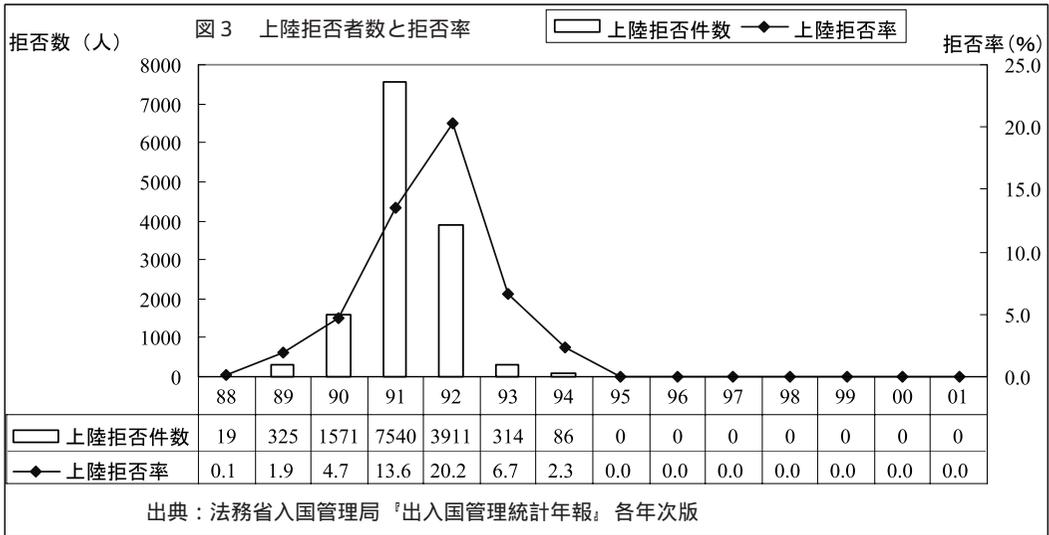
東アジア、東南アジア、南アジアの来日外国人輩出国とは異なり、イランからの出稼ぎは日本にほぼ限定されている。産油国ということもあり、それまではむしろ労働力を受け入れる側であった。しかし、1979年のイスラム革命以降、最初はアメリカへの移民が多数発生し、次いで西欧への難民・庇護申請者が流出した。これは労働力輸出とはいえないが、日本へ出稼ぎに先立つ国外流出の波を形成している。日本へ出稼ぎは、こうした流れのうちの最後に当たるものであり、イラン・イラク戦争終結後の不景気と兵役上がりの若者が都市にあふれるというプッシュ要因で説明されることが多い。階層的にも、富裕層が多いアメリカへの移民はいうに及ばず、ヨーロッパに向かった者と比較しても、相対的にかなり低いといわれている。

イランから日本へ出稼ぎでもっとも特徴的なのは、流入期間が短いことである。すなわち、89年に少数が渡日を始めてから92年に査証免除協定が停止されるまで、3年強の期間しかたっていない。同じく査証免除協定が停止されたバングラデシュ人の場合、その後もブローカーを利用するなどして来日した比率が全出稼ぎ者4分の1を占める。細々と流入の経路が確保されていたことにな

るが、イラン人の場合そうした形での流入は統計的には無視できる程度で、実質的に92年で止まったといつてよい<sup>(5)</sup>。短期間に集中して来日し、急速に減少していったのが、イラン人の特徴といえる。

ここで図1をみると、出入国の差が90年に急増し、91年にピークに達し、93年以降はほとんどなくなっていることがわかる。退去強制者の数は、91年に急増して92年には早くもピークに達している。その後は、図2にみるように徐々に減少し、2001年1月を最後に国籍別統計には現れなくなった<sup>(6)</sup>。上陸拒否数を見ると、91年をピークとして急減し、95年以降はゼロが続いている。上陸を拒否された比率をみると、91年には13%、92年には20%に達しており、日本行きが失敗に終わるリスクがかなりあることを示す(図3参照)。急増後すぐ急減する——このようなイラン人流入の特徴は、図2の超過滞在者の総数とイラン人の数値を比較するとわかりやすい。





2002年以降は3000人を切ったといわれるイラン人超過滞在者であるが、超過滞在から日本人との結婚により合法的な在留資格を得たものもいる。表1は、イラン人登録者数を示すものであるが、登録者のうち「観光」は超過滞在者のうち外国人登録をした人数を示すと考えてよい<sup>(7)</sup>。観光の人数は、94年にピークに達してから漸減していくが、一方で日本人の配偶者等（日本人と結婚した人数と考えてよい）は増加していく。2001年以降減少しているのは、永住者への査証切り替えを行った結果と考えられる。結婚して一定期間が経過したこと、永住者査証取得を入管が奨励していることの結果とあってよいだろう。

表1 イラン人登録者数の推移

	1990	1992	1994	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003
観光	294	2,994	5,999	5,810	5,137	4,277	3,333	2,531	2,054	1,677	1,336
日本人の配偶者等	190	234	289	532	758	979	1,359	1,533	1,549	1,361	1,204
定住者	59	78	83	95	103	124	153	195	246	278	286
永住者	56	83	120	169	188	219	284	436	625	928	1,234
合計	1,237	4,516	8,207	8,418	7,946	7,217	6,654	6,167	5,921	5,769	5,621

出所：『在留外国人統計』各年次版、各年末の人数

### 3. 調査方法

本稿の元となるデータは、3回のイラン調査により得られたものである。1回目は、2002年12月23日～2003年1月5日までイランに滞在して予備的な調査をした。2回目は、2003年8月1日～26日にテヘランと近郊の都市であるロバートキャリムに滞在して88人にインタビューを行った。3回

目は、2004年12月12日～2005年1月10日までテヘラン近郊のイスラムシャーに滞在して32人にインタビューした（巻末表を参照）。

調査に際しては、厳密なサンプリングを行うのは不可能であるが、テヘランの下町にあるバザール周辺で渡日経験者を探し出すのはそれほど難しくなかった。図1に示したように、大きく以下の5つの方法で対象者に接触し、他の渡日経験者を紹介してもらった<sup>(8)</sup>。

筆者らと日本で友人だった(1)氏に、通訳と紹介をお願いした。(1)氏は、トルコ系の遊牧部族であるシャーサバンの一員であり、親族から多数が来日していた<sup>(9)</sup>。(1)氏の親族のうち所在が明らかかな人と、それ以外の知人・友人に対してインタビューした。

テヘラン大学の日本人留学生であるA氏に、通訳と紹介をお願いした。A氏の父親が役員を務める工場にイラン人従業員がおり、それがA氏留学の背景となっているため、氏のとついで渡日経験者を紹介してもらった<sup>(10)</sup>。

テヘランの大バザールの一角にある金のバザールには、渡日経験者が多くいた。ここに通り、出入りする両替商も含めてインタビューを行った。

大バザールの布問屋と雑貨卸の地区、およびバイク部品のバザールで、渡日経験者がいないかを尋ね歩き、インタビューを行った。

テヘランの街を歩いていると、渡日経験者から声をかけられることがある。その際にインタビューを依頼した。

シャーサバン(1)氏：49人 (2)～(29)(31)～(42)：(1)氏の紹介 (30)：街で会ったシャーサバン (43)：(3)の義兄 (76)：友人 (77)(78)(80)：近所の人 (81)：(80)の友人 (82)：(11)の紹介	通訳A氏：16人 (53)(54)：知り合い (60)：A氏の父親の会社で働く (61)～(65)：友人 (66)～(70)：(64)の友人 (73)(106)：A氏の友人の紹介 (88)：近所の人
街で声をかけられる：13人 (44)(72)(79)(95)(107)(111)(114) (45) 兄(55) (57) 従兄弟(52) (58) 共同経営者(71)	金バザール：21人 (83)～(87)(89)(91)～(94)(96)～(105)(110) バザールで尋ね歩く：21人 (46)(47)(59)(74)(75)(90)(108)(109)(112)(115)～(120) (48) 一緒に来日(49) (50) 日本での友人(56)

図4 回答者へのアクセス方法

#### 4. 出稼ぎ者の背景

##### (1) エスニシティと出身地

まず、日本で行われた調査では看過されていたこととして、来日イラン人にトルコ系が多いという山岸らの知見がある (Yamagishi and Morita 2002)。我々の調査でも、トルコ系は半数強を占めるが、トルコ系のシャーサバンを重点的に調査したため、サンプルの選択にバイアスがかかっている (表2)<sup>(11)</sup>。シャーサバンを除いた場合、トルコ系は30%、ペルシャ系67%で残り3%がそれ以外のエスニシティになる<sup>(12)</sup>。このようにトルコ系が一定の割合で存在する理由は2つ考えられる。トルコ系はイランにおける最大の少数民族であり、全人口の4分の1に達する。それゆえ、渡日イラン人にも人口比程度にはトルコ系が存在した。山岸らが指摘しているように、渡日イラン人をもっとも多く輩出しているのはテヘランの下町にある大バザールの周辺部である<sup>(13)</sup>。バザール周辺はテヘランでもトルコ系が多く住む地区であることから、人口比以上に日本ではトルコ系が多かった可能性はある<sup>(14)</sup>。

表2 回答者のエスニシティ

	人数	%
トルコ系	65	55.1
うちシャーサバン	(42)	(35.6)
ペルシャ系	49	41.5
アラブ系	1	0.8
クルド系	2	1.7
ロシア系	1	0.8
合計	118	100.0

表3と表4では、出身地、来日前の居住地、現住地を示している。現住地や来日前の居住地がテヘランおよび近郊に集中しているのは、調査地点の選択上いわば当然の結果である<sup>(15)</sup>。ただし、出生地をみても国内移動の経験者である場合は少ないことから、テヘラン生まれテヘラン育ちの者が多いといえよう。網掛け部分は出生地と来日前の居住地が同じ場合を指し、それが全体の68.9%を占める。表3のアフマッドルーという地名は、テヘランとテヘランから南西150キロのサーベの中間にある小さな村を指す。ここは、シャーサバンのうちアフマッドルーというグループが住んでいたところで、アフマッドルーからテヘランないし近郊、あるいは100キロ離れたゴムへと移り住んでいったことがうかがえる<sup>(16)</sup>。

表3 来日前の国内移動

		出生地				合計
		テヘラン	アフマッドルー	テヘラン近郊	それ以外	
来日前 居住地	テヘラン	72	5	7	8	92
	アフマッドルー	0	3	0	0	3
	テヘラン近郊	2	7	6	1	16
	ゴム	0	6	1	0	7
	それ以外	0	0	0	1	1
	合計	74	21	14	10	119

表4 回答者の現住地

	度数	%
テヘラン	76	63.3
テヘラン近郊	37	30.8
ゴム	6	5.0
アフワース	1	0.8
合計	120	100.0

## (2) 学歴と職歴

学歴と職歴は、出稼ぎ者の社会経済的背景を知る上でもっとも重要な要素である。まず学歴をみると、高校中退・卒が7割に達しており圧倒的に多い（中退はそのうち1割以下）。それに次ぐのが中学卒・中退であり、専門学校・大学に入学した経験がある者の比率は、小学校卒・中退より低い水準にとどまる。(92)氏や(104)氏、(120)氏が該当するが、いずれも途中でやめており、卒業者はいなかった。中退を入れてもこの人数であるから、学歴が高いとは言いがたい。

90年代前半に筑波大学が行った調査では、大卒の比率が表5よりずっと高くなっている。これは、我々がテヘランの下町で行ったため、駒井の言う「バザール商人層」に偏った可能性が考えられる。それとともに、筑波大調査でアンケートに答えたのが高学歴層に偏っていた可能性もあるだろう。(68)氏や(1)氏のように、大学受験と日本行きの双方を選択肢として持っていた場合もある。

表5 回答者の学歴

	度数	%
小学校卒・中退	6	5.0
中学校卒・中退	24	20.2
高校卒・中退	84	70.6
専門学校卒・中退	2	1.7
大学中退以上	3	2.5
合計	119	100.0

- (92) 氏の場合：大学では生物学を専攻したが、面白くなくて1年でやめてしまった。それから紙加工の会社でプレスの仕事をしていた。
- (104) 氏の場合：大学夜間部の英語学科に1年半通い、昼は絨毯修理の仕事をしていた。日本行きの話があちこちで出ていて、金もなかったので大学をやめて出稼ぎに行った。航空券に400ドルかかり、持ち金が400ドルしかなかったが、入管で所持金も確かめられず、無事に通過できた。成田から羽生で働いている友人の家に直行した。そこから群馬県大泉町で働いている友人に電話して、最初の仕事を見つけた。
- (68) 氏の場合：高校を卒業して、電柱を作る会社で働いていた。しかし、このまま働き続けても、せいぜいアパートと車を買える程度の生活しかできない。そのため、大学に入るか外国に行くために、給料から貯金をしていた。ある年、大学の入試を受けて2校に合格し、同時に当時とるのが難しかった日本行きの航空券がとれた。どちらにするか考えた結果、学費を稼ぐために入学を半年延ばして日本に行って働いて戻ってくることにした。
- (1) 氏の場合：生まれたのはアフマッドルーだが、小学校までしかないのその後はゴムの兄のところに身を寄せて学校に行った。高校を卒業すると2年間軍隊に行かねばならないので、テストを白紙で出して1年留年した（教師にはさんざん怒られた）。卒業して兵役に行き、最初の3ヶ月はイスファハーンで訓練を受け、それからトルコ国境のウルミーエに配属された。兵役中、事務方にいたし特に戦闘もなかったので、楽なほうだったという。戻ってきて、(42) 氏のやっている工場で働きながら大学を受験した。国立と私立の医学部を受けたのだが、国立が不合格だった時点で日本に行って学費を稼いで来ることにした。テヘランの空港に見送りに来た兄が、私立大学の合格通知を持ってきたが、私立に行く金はないし今さら取りやめるわけにもいけないので、何ともいえない気持ちで日本に向かった。

次に、渡日時点での職業をみてみよう。イラン人来日に関わる背景として言われるのが、イラン・イラク戦争の終結に伴う不景気と大量の帰還兵であった。表6の一番下にある兵役後すぐ渡日した人が16人に達することは、この言説に適合する結果とってよいだろう。そのうち、兵役と渡日との関連について言及するのは、イランに嫌気がさしたという(24)(56)氏と、兵役時の配属先が

ら情報を得たという(85)氏しかいなかった。兵役との関連は、日本行きブームと街に戻ってきた職の無い若者の存在というマッチングとして考えるのが妥当だろう。

(24) 氏の場合：高校を卒業して2年間の兵役に従事し、すぐに日本に行った。イランに嫌気がさしており、日本に限らず他の国に出たいと思っていたので、帰ってくるつもりはなかった。費用は父親に出してもらった。

(56) 氏の場合：高校を中退して父親のパン屋を手伝い、18歳で2年間兵役に行った。兵役から帰ってすぐに渡日した。出稼ぎとはいえ金が目的ではなく、戦争が終わったばかりで荒廃しており、とにかくイランから出たかった。

(85) 氏の場合：兵役後、すぐに日本に行った。兵役の時にはイランの入管にいたから、手続きや行き方には詳しくなかった。父親が公務員だったため、イラン航空が割引になった。

次に、駒井(1999)が「バザール商人層」と呼ぶ自営の販売職と被雇用者の販売職層は、全体の4分の1弱になる。(73)氏は、その典型例といえるだろう。とはいえ、(57)氏のように店舗を持たずバザールの路上で営業する闇両替商7名も、自営の販売に含めてある。バザールの被雇用販売職のような潜在的な自営業層を視野に入れ、なおかつバザールを主な調査地としたことを勘案しても、バザール商人層と呼びうる者が多数派とはいえないだろう。

表6 渡日時の職業

職業	人数	%
自営	33	27.7
生産・保安	11	
販売	13	
事務	2	
運輸	6	
農業	6	5.0
被雇用者	47	39.5
生産・保安	25	
販売	14	
農業	1	
事務	4	
専門	4	
運輸	1	
不明	1	
家業手伝い	14	11.8
生産・保安	6	
販売	7	
運輸	1	
失業	2	1.7
学生	2	1.7
兵役	16	13.4
合計	119	100.0

(57) 氏の場合：高校を卒業してから兵役に行き、蛇口製造の工場で働きながら3年間夜間の英語学校に通い、それから路上で闇両替をやっていた。その時に、ある客が真新しいドル札を持ってきたので、どこから持ってきたのか聞いたら、日本で働いていたという。彼と話して、日本に行けば金が貯まると言われた。航空券は高くないし、定職もないし、ちょっと日本を見に行っても金は大して失わないと思い、渡航することにした。両替をやるにはある程度の資金がなければできず、日本に行く程度の金はあった。

(73) 氏の場合：クルド人が仲買となってアラブ諸国に輸出する服の卸売りをしていた。が、イラン・イラク戦争の時に南部のイラク国境地帯で2万人が爆撃で殺された際、仲買のクルド人も亡くなり、未払いの金も回収できず、仕事もダメになった。そうしたときに友人に誘われた。北千住に住んでいる友人宅に半月くらい世話になった。その友人の友人が働いている豊田市の自動車整備工場を紹介してもらった。



写真 1：共同経営するバザールの布問屋で、中央が (57) 氏



写真 2：今は絨毯店を営む (73) 氏

販売職よりむしろ多かったのは、自営と被雇用者とを問わず、生産・保安職のようなブルーカラーである。(42) 氏のように労働集約的な軽工業に従事する者が多い。とはいえ、販売と生産・保安の壁は厚いわけではなく、(45) 氏のように両方を渡り歩く例も多い。(2) 氏のようにバスやトラック輸送を個人で営む者は、生産・保安に通常は含まれるが、6名と一定数いるため分けてある。(44) 氏のような農業従事者は6名、自営・被雇用含めて事務職は6名であり、全体としてホワイトカラーの比率は5%と低い。グレーカラー・ブルーカラーの自営・被雇用者が圧倒的な比率を占めるといえるだろう。ただし、失業中の者は2名にとどまっており、「仕事が無いから出稼ぎに行く」わけではない。

(42) 氏の場合：高校修了後、兵役で2年間海軍に行ってから、革やビニールのバッグや靴、服の塗装工場を始めた(写真参照、前述のように(1)氏もこの工場で一時期働いている)。しかし、戦争が終わったばかりで仕事がなくなり、日本に行くことがニュースでも新聞でも、ど

こでも話題になっていたので日本に行くことにした。最初は下館にいた(1)氏に身を寄せた。滞日中も工場をたんだわけではなく、5～6人の従業員は仕事をしていたが、実質的には開店休業という感じだった。

(45) 氏の場合：高校修了後、兵役に2年間従事し、その後は来日までの期間ほとんどをバザール内の服屋の店員をしていた。日本に行く直前に仕事を変え、短期間自動車修理工場で働いた。

(2) 氏の場合：兄がテヘランにあり、13歳で中学校を中退してテヘランに行って、会社で働いたり、配管工をやったりしていた。20歳ぐらいのときに、1人でトラックを購入して運搬する仕事を始めた。弟がすでに渡日しており、家族の生活費にあてるのともっと大きなトラックをかうために、自分も1年半くらい日本で働くことにした。

(44) 氏の場合：高校を卒業して兵役に行き、それから石油会社で2年、ガラス製造の会社で2年働いた。その後、自分で養鶏を始めたが、戦争後で景気が悪かったこともありあまりうまくいかなかった。



写真3：印刷する(42)氏



写真4：(42)氏の工場で作っているバイクのシートカバー

## (3) 日本以外の外国とのつながり

前節で、欧米へのイラン人移民と日本への出稼ぎ者の階層的相違についてふれたが、日本以外の国とのつながりはどの程度あるのだろうか。まず、日本以外の出稼ぎ経験をみると、経験がある者は3人しかいなかった。そのうち、(47)氏は来日前に「日本直行で入国拒否」を避けるべく、他の国に行っていた実績作りとしてマレーシアと韓国で短期間就労している。残る(35)氏と(39)氏は、日本からの帰国後に韓国とブラジルで就労している。双方の事例とも日本の就労が海外での就労を促した事例であり興味深い、例外的な部類に属する。

表7 日本以外の出稼ぎ経験と移民した家族・親族

	日本以外の出稼ぎ経験		日本以外に移民した家族・親族	
	人数	%	人数	%
なし	116	97.5	107	89.2
あり	3	2.5	13	10.8
合計	119	100.0	120	100.0

- (47) 氏の場合：中学を卒業後、父親の下で縫製の仕事をしていた。友人から日本に仕事があると聞いて、中学の同級生と一緒に渡日した。日本に入国しやすいように、マレーシアで3ヶ月間ビデオテープのケースを作る工場で働き、それから韓国に渡り2ヶ月間ラーメン店で働いてから日本に行った。成田到着前から日本にいる友達に電話して、仕事を探してもらっていた。友人の勤務先の社長が、友達がいたら連れてきてくれと言っていたので紹介してもらい、来日後すぐに仕事を始めた。
- (35) 氏の場合：高校を卒業後、家業の牧場を手伝っていた。1991年～92年まで1年半日本で働き、生後間もない子どもをおいてきたため帰国した。それから家具製造の仕事をしたが、96年12月から韓国へ働きに行った。これは正規の就労で、貿易会社のアシスタント・マネージャーとしていった。2年のビザをもらい、3年まで更新することもできたが、韓国の経済危機になったので1年半で帰国した。自分の従兄弟も含めて、シャースバンの中のグループが十数人韓国にいたため、自分も韓国に行った。自分も含めて多くの者は、日本から帰国して後悔しており、韓国で働きつつ日本のビザを取得して再渡日を試みていたが、結局誰もビザをとれなかった。韓国の給料は安かったため、貯蓄もぜんぜんできなかった。
- (39) 氏の場合：1990年来日、96年に入管に捕まって帰国してから、すぐにイランでトレーラーの運転手をした。それから、日本で知り合ったブラジル人を頼って98年にブラジルに渡り、2年間トレーラーの運転手として働いた。滞伯中に通貨レアルの対ドルレートが3分の1に下落し、1000ドルだった給料が300ドルになったため、イランに戻ってきた。しかしブラジルは大好きだから、機会があったら移民したいと婚約者とも話している。

(18) 氏や (51) 氏のように、出稼ぎではないが商売で外国に行った経験のある者も何人かいる。(120) 氏は短期間日本に行っているが、出稼ぎ以外で過去の渡日経験があったのは彼だけであった。日本以外に移民した家族・親族がある者は10%にのぼっており、アラブ首長国連邦にいる者1名を除くと、全員が欧米ないしオーストラリアになる。10%という数値の評価は難しいが、恐らくテヘラン近郊の人口一般よりは高い比率になると思われる。その意味で、欧米への移民とまったく無関係な層が渡日しているとは必ずしもいえない。

(18) 氏の場合：渡日1ヶ月前に、イランからトルコ、ブルガリア、ユーゴスラビアにお茶を売りに行き、向こうからガラス細工を持って帰るビジネスを試みた。2回往復したが、出費ばかりかさんでまったく儲からなかった。

(51) 氏の場合：自動車部品の販売をしていた父の仕事を手伝っていた。部品を買い出しに、ドバイやロシアに短期間行ったし、シンガポールに観光旅行したこともある。銀細工を覚えに友人と中国へ行ったときには、4日で病気になり帰国した。このときには、チャーハンを食べてすっぱい味がしたので、こんなところにはいられないと思った。来日時には、成田の入管で日本に来て何をするのかとペルシャ語で聞かれた。いくらあるのかと聞かれてドルを見せ、パスポートをみた審査官が、たくさんビザがあってvery goodだと言ってスタンプを押してくれた。

(120) 氏の場合：長期滞在の前に、88年と89年の2回日本に数日間滞在したことがある。そのときには、中国と日本で品物（たとえば中国で上履き）を仕入れてイランで売ると、交通費と小遣い程度にはなるので、市役所勤務の間のアルバイトのような感じだった。長く行こうと思ったのは、日本語を勉強して通訳みたいになれれば儲かると思ったからだが、行ってみて全然ダメだとわかってあきらめた。

#### (4) 渡日費用と捻出方法

前述のように、出稼ぎ者のほとんどはグレーカラーかブルーカラーで、下層中産階級が多いといっ  
てよいだろう。そうした彼らは、どの程度の渡日費用をかけ、それをどのようにして捻出している  
のだろうか。表8に示したように、3001~4000ドルが最頻値となっているが、特定の額に集中して  
いるわけではない。(60) 氏の記録が示すように、当時は以下のような噂が流通していた。イラン  
航空の直行便は安いが入国拒否の可能性が高く、他の航空会社であちこち経由してきたほうがよ  
い。空港で見せる現金も、できる限り多いほうがよい。リスクはあるが、最低限の条件で渡航し  
ようとした場合、(59) 氏のような1000ドルという額になる。空港職員でイラン航空は無料だった、  
公務員なので半額以下だった、という者もいた。

表8 渡日に要した費用

	人数	%
～2000ドル	20	20.2
2001～3000ドル	22	22.2
3001～4000ドル	27	27.3
4001～5000ドル	19	19.2
5000ドル～	11	11.1
合計	99	100.0

- (59) 氏の場合：戦争でバザールの経済が悪く、父親が経営していた靴下製造の会社が倒産し、自分も手伝っていたので失業した。それで、巷で噂になっている日本に出稼ぎをしようと思った。先に友人が日本に行っており、日本の状況はいいからと誘われたこともある。当時の噂では、チケット代が300ドル、旅行準備が200ドル、入管に見せる金が500ドルという具合で、1000ドルあれば大丈夫と言われていた。それより多ければ多いほど、成功の可能性は高くなるとも言われていたから、4000ドル持って行って見せ金として、すぐにイランに送り返すという方法をとる人もいた。自分は1000ドル使ったが、当時の自分にとっての1000ドルというのは大きい金で、たくさんの友人に少しずつ借りて調達したが、それ以上は無理だった。成田到着後、パキスタン人アパートで少し過ごし、滞在費と職業紹介料を払って仕事をみつけた。最初は自分が単身で日本に行き、稼いだ金を送って兄弟2人を、最終的に半年後には婚約者と呼び寄せた。兄弟 婚約者 叔父 従兄弟の順で呼び寄せた。イランで辛い生活をしていたため、助けたいと思っていた。
- (60) 氏の場合：4000ドルかかったが、母が貴金属を売ってつくってくれた。キャセイパシフィックだから高くついたが、キャセイは入国拒否の確率が低い（90%の確率で入国できる）と聞いていた。日本に行って2ヶ月で母には4000ドルを返して、母はまた貴金属を買い直した。

費用の捻出方法については、表9が示すように4分の3が自費でまかなっている。(99) 氏のように、自分所有の自動車を買ったという者もいたが、多くはその程度の貯金ならばあったと答えていた。それ以外では、前述の(60) 氏のように家族に借る場合、(59) 氏のように友人に借る場合、(1) 氏のように複数を組み合わせる場合が多く、(18) 氏のように業者に借る場合はほとんどない。友人に借りて渡航費をまかなうケースが、一番経済的に苦しい層の調達方法になるだろうが、そうしたケースはさして多くない。(64) 氏や(89) 氏のように、日本にいるイラン人の友人から借りたケースも何件があった。

表9 費用の捻出方法

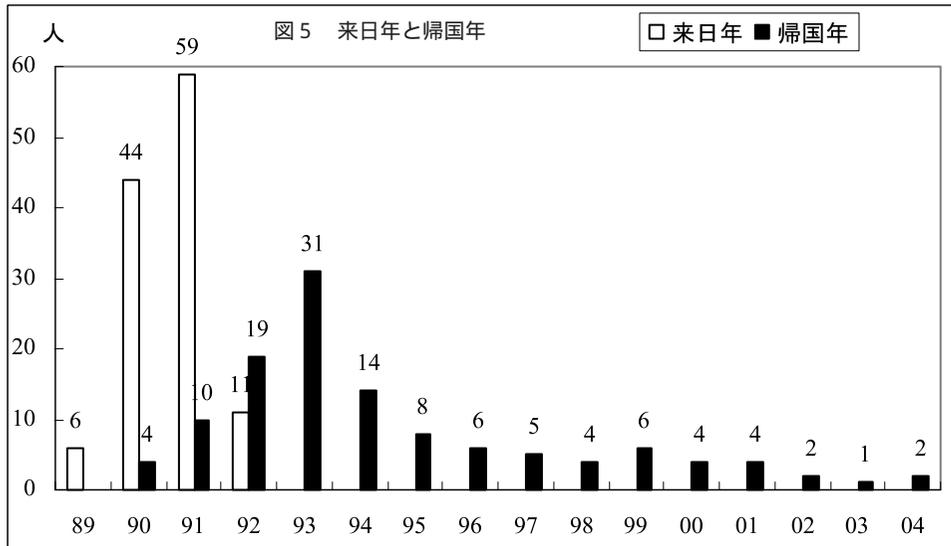
	自費	家族	友人	金融業者	人数	%
					75	72.8
					11	10.7
旅費の調達先					3	2.9
					5	4.9
					1	1.0
					4	3.9
					2	1.9
					2	1.9
合計	83	22	10	2	103	100.0

- (1) 氏の場合：全部で4000ドルかかった。そのうち1700～1800ドルは、高校までにアルバイトしていた貯金と、卒業後半年働いて稼いだ分になる。残りは、父親と兄から借りた。
- (18) 氏の場合：渡航費は全部で4000ドルかかったが、金融業者に借りた。
- (64) 氏の場合：渡航費は2500ドルくらいかかった。これを自分の貯金、母親からの借金、先に日本に行っていた(69)氏からの借金でまかかった。日本についたときにも、新潟にいる(69)氏の家に行き直した。
- (89) 氏の場合：兄と一緒に靴下工場を経営していたが、倒産してしまった。それから1年間、金バザールで客引きをやっていたが、日本に行くことにした。とはいえ金がないため、大阪にいたイラン人の友人2人に4000ドルを送ってもらった。借りる際の条件として、日本で働いて返す、入国できなかった場合には2年以内に返すというものだった。
- (99) 氏の場合：友人3、4人で店を借りて皿を売る店を始め、革命の影響で品物が入って来ないので、布屋に転業して7年間働いた。それから短期間、闇両替と金売買のプロローカーをやっていたが、政治的な抑圧体制でビジネスもやりにくく、インフレも起こって儲からないから、知り合いがいた日本に行くことにした。航空券に400ドル、持ち金は1000ドルだった。ペイカン(国産メーカー)の車を売って旅費にして、残った金は母の生活費として渡した。友人3人で来日し、10日間仕事を探した後、パキスタン人プロローカーに金を払って職に就いた。

5. 日本に着くまで

(1) 来日年と滞日期間

図5をみると、2節でみた入国のパターンを、我々のデータも忠実に踏襲している。89年来日者が6名いるが、他は90～92年に集中している。93年以降はゼロだった。この点は、渡日して超過滞在した者の4分の1が査証免除協定の停止後の来日であったバングラデシュ人とは異なる(樋口・稲葉 2003)。



ただし、図5は複数回渡日した場合であっても最初の渡日年と最後の帰国年しか含まない。表10にみるように、複数回来日した者も10名いる。(20)氏や(85)氏のように、超過滞在になる前に帰国したケースもかなりあると考えてよいだろう。(117)氏のように、いわば見聞を目的として旅費を稼ぐために働く者も、一定程度いたと思われる。また、入国拒否されたり他の国で捕まったりしたが、来日を試みて失敗したケースもある。来日挑戦回数と来日回数の差は、失敗の数を示す。

表10 来日挑戦回数と実際の来日回数

	来日挑戦回数		来日回数	
	人数	%	人数	%
1回	106	88.4	110	91.7
2回	9	7.5	8	6.7
3回	3	2.5	2	1.6
4回	1	0.8		
7回	1	0.8		
合計	120	100.0	120	100

(20) 氏の場合：90年に、すでに来日していた従兄弟を頼って渡日し、超過滞在にならないように3ヶ月だけ働いた。それから91年に再来日した。今度は、特に滞在期間を決めておらず、1年半後に母が病気なので帰国した。

(85) 氏の場合：90～92年にかけて、3回来日し、それぞれ40日、2ヶ月、3ヶ月滞在して働いた。来日したのは毎回仕事のためだが、毎回すぐに疲れて帰国した。そしてイランに戻ってもやる気をなくして、また日本に行くという形で3回も行った。

(117) 氏の場合：バイク部品販売の店を持っていたので、特に出稼ぎの必要はなく、金を貯めるつもりはなかった。最初から3ヶ月の予定で、働きながら日本を見聞しようと思っていた。成田空港で宣伝をみて、越谷にあるホテル・メヘディ（日本人が経営だが、マネージャーはイラン人）に数日宿泊し、そこでパキスタン人ブローカーに仕事を紹介してもらった。湾岸戦争が起こったため、飛行機が飛ばなくなって帰国が1ヶ月遅れて4ヶ月日本に滞在した。

さらに表10の失敗は、92年の査証免除協定の停止後にも渡日を試みた2つのケースを含む。(54)氏と(59)氏は、帰国後再度の渡航を試みて失敗している。(54)氏は、その後銀細工を習って銀製品の店を始め、今では2つの店舗を経営するまで成功している。(59)氏は、来日を諦めて以降、靴下工場の被雇用者から再開し、調査時点では靴下工場を経営するようになっていたが、工場も家も賃貸だった。家に呼ばれた時、ケバブを焼きながら「人生でもっとも良い時を過ごしたところには、もう一度行ってみたいものだよ」と今でも短期間日本を見に行きたいと語っていた<sup>(17)</sup>。

(54) 氏の場合：空港で働いていたが、当時の月給は55万リアルで生活費にもならなかった。そのため日本に働きに出て、八王子のプラスチック成型の工場で働いていた。時給は900円と安かったが、夜中まで仕事があったので1日1万2000～3000円程度にはなった。妻が当時未成年で、孤独に耐えられず帰ってくるように懇願したので帰ってきた。貯金は2800万リアルだったが、中古車を一台持ち帰って売ったら4000万リアルになった。そのうち900万リアルを借金返済にあて、一部は家を買うのに、一部は株の購入に使った。帰国後は、車を借りてレンタル料を払いながらタクシー運転手をしていた。しかし仕事は大変だし、タクシーの許可証をなかなか出してもらえなかったりして疲れてしまった。それで、もう一度日本に行こうとした。借金していったが、高い金を払えば東南アジア経由の安全な空路で行けたが、金が無いので2000万リアル出してロシアから海路で入国しようとした。しかし、ウラジオストクで捕まってしまう、ロシアの刑務所に入れられた。ロシアの刑務所は、食事も最低限のひどいものしか出ず、トイレもなく死にそうな目にあった。持ち金を全部渡して何とか返してもらった。彼の知る範囲では、偽造パスポートで日本に行こうとした人もほとんど失敗しており、途中の東南アジアで死んだ人を何人もいるという。

(59) 氏の場合：建設の仕事をしていたが、仕事はたくさんあって毎日7時まで、日曜日でも半日働いていた。月5000ドル稼ぎ、1000ドル生活費に使って4000ドルを送金していた。全部父親に送り、父親は家と店を一軒ずつに自動車を買ってくれていた。来日後半年して婚約者呼び寄せ、イラン大使館で結婚届を出して一緒に住んだが、妻はずっと1人で友人もいないままだった。寂しいので、子供を作って気をまぎらわそうとした。妊娠3～4ヶ月のときに体調を崩して医者に行ったが、ホームシックが原因で、帰国した方がよいと言われた。それで妻を先に帰国させ、自分も最初の子どものため父親としての責任感もあり、子どもが生まれる

頃に帰国した。帰国後すぐに靴下製造の仕事に戻ったが、日本の規則正しい生活が体に染みついていて、イランの生活になじめなかった。規則正しい生活、他人に迷惑をかけない生活に慣れていて、イランの生活は精神的にもたなくてけんかばかりしていた。そのため、もう一度日本に行こうとした。妻は自分のせいで帰ったという負い目があったため、戻ることを積極的に提案している。このとき、日本の雇用主も労働ビザをとれるようがんばってくれたが、成功しなかった。家族一緒に、6回は偽造パスポートで日本に行こうとした。そのうち、シンガポール経由で成田に1回、トルコ経由で大阪に1回到着できたが、2回とも入国を拒否された。フランス国籍のパスポートを作ってマレーシア経由で行こうとしたときには、マレーシアで捕まって6ヶ月収容所に入れられた。こうした偽造パスポートで旅行すると、1回1人1万ドルかかる。しかし金はあったので、何度も試みた。3～4年は、日本に行こうとして店を畳み家も売り、決まった生活場所もなかった。結局、金がなくなってようやくもうダメなのだ、とわかった。それで諦めて靴下製造の仕事に戻った。



写真5：今はアクセサリーの店がうまくいっている(54)氏夫妻

図6が示すように、渡日時の年齢は20代が圧倒的に多い。20代前半が最頻値であることは、戦争から戻った若者が来日したという説を一定程度裏付ける根拠になるだろうが、20代後半もほぼ変わらないくらいにのぼる。その意味では、帰還兵+生活基盤を確立していない若者が、出稼ぎの中心層であったといえる。表9が示すように、来日時結婚していない者が7割であることも、比較的気楽に海外に行ける立場にあった層が多かったことを示唆しているだろう。

帰国時の年齢をみると、若くして渡日した者の方が長く滞在する傾向を示している。これは、年齢が上がると既婚者の比率が高くなり、妻子のために短期間で帰国することによる。表9をみると、来日前に結婚している者の8割以上が2年以内に帰国している。同時に、来日時35歳以上だった者は全員が日本に何らかのつてをもって渡日していた。若年層のような無謀な渡航はしないというこ

とだろう。未婚だった者の場合、2年以内に帰国した比率は4分の1以下であった。さらに、日本に5年以上滞在していた者の6割が調査時点で未婚であり、長期滞在が婚期を大きく変えていることもうかがえる。

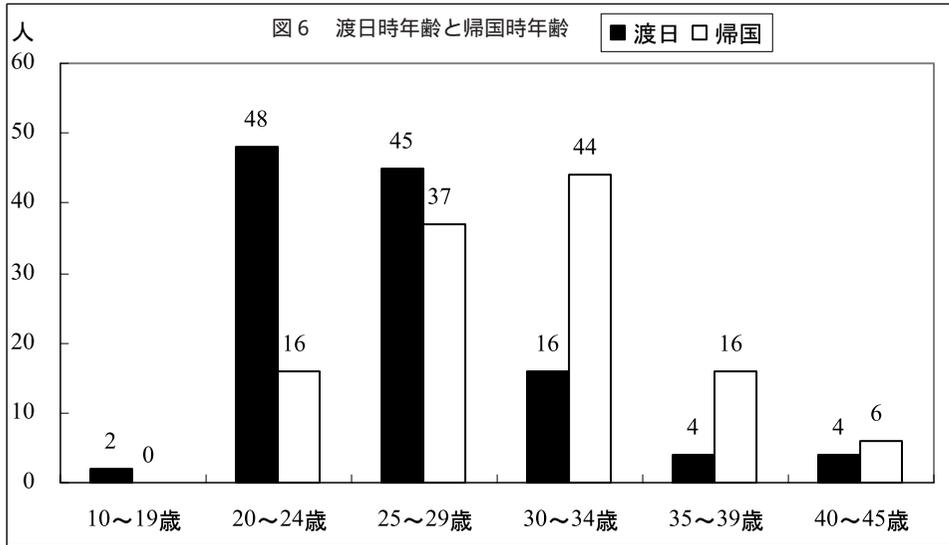


表9 滞日期間 と 婚姻状況

	来日前結婚		帰国後結婚		未婚		日本で結婚		合計	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
半年以内	5	83.3	1	16.7	0	0.0	0	0.0	6	100.0
半年～1年以内	8	66.7	3	25.0	1	8.3	0	0.0	12	100.0
1～2年以内	18	56.3	11	34.4	3	9.4	0	0.0	32	100.0
2～3年以内	4	16.7	17	70.8	2	8.3	1	4.2	24	100.0
3～5年以内	1	6.3	11	68.8	4	25.0	0	0.0	16	100.0
5～10年以内	1	4.2	12	50.0	11	45.8	0	0.0	24	100.0
10年以上	0	0.0	0	0.0	6	100.0	0	0.0	6	100.0
合計	37	30.8	55	45.8	27	22.5	1	0.8	120	100.0

p<0.01



写真 6 : 1947年生まれ、来日時44歳で最年長の(32)氏

## (2) 来日のネットワーク

イラン人の渡日については、町中に日本行きの噂が広まって出稼ぎがブームとなったといわれる。「成田空港や上野公園で寝泊りするイラン人」というステレオタイプからすれば、計画性のない出稼ぎという見方は正しいように思われる。しかし、現実には一定のネットワークを基盤とする形での出稼ぎと、つてを持たず噂頼りの渡日を試みる場合があるだろう。来日家族・親族の有無と、渡日時の身の寄せどころをみることで、渡日がどの程度までネットワークを基盤としているのかを明らかにしていく。

まず、表11では本人より先と後とを問わず、渡日家族・親族がいるか否かを示している。親族集団であるシャーサバンとそれ以外に差があるのは当然とはいえ、シャーサバン以外では渡日家族・親族がいない者が半数強にのぼる。とはいえ、半数弱が滞日経験を持つ家族・親族がいると答えているとも考えられる。シャーサバンのような特定の親族集団以外でも、親族ネットワークは一定の影響を及ぼしているといっていよう。シャーサバンのうち、渡日した兄弟がいる者は4分の1であった。必ずしも、特定の家族から集中的に渡日したわけではなく、それよりは弱い紐帯である親族を基盤として「適齢期」の男性が出稼ぎに行ったと考えられる。シャーサバン以外では兄弟と親族がほぼ同数であることから、シャーサバンよりは親族より家族の紐帯を利用した度合いが高いといえよう。

こうした傾向は、表12をみても明らかである。シャーサバンの場合、渡日時に身を寄せたのが兄弟である比率は1割強にとどまる。親族が6割程度と圧倒的に多い。友人は5%弱、ブローカーは1割強であり、シャーサバン以外と比較すると格段に少なくなるが、親族ネットワークを利用しない者もいたことになる。シャーサバン以外の場合、親族と兄弟が1割弱で同数なのに対し、友人が半数弱、ブローカーが3割強とシャーサバンとは逆の結果となった。ここでブローカーを利用する者

は、日本到着後に身を寄せられる知己がなかったわけであり、「噂頼み」が全体の4分の1に達している。4分の3が何らかのつてを持っていたとみるべきか、4分の1が何のつても持たずに渡日したとみるかは難しいが、「上野公園で寝泊りするイラン人」は渡日者のマイノリティであるとはいえるだろう。

具体的には、こうしたネットワークがどのように使われるのか。3つのパターンに分けて事例をみていくこととする。

表11 渡日家族・親族の有無

		シャーサバン以外		シャーサバン		合計	
		度数	%	度数	%	度数	%
渡日家族・親族	なし	41	100.0	0	0.0	41	100.0
	兄弟	17	60.7	11	39.3	28	100.0
	親族	19	38.0	31	62.0	50	100.0
	合計	77	64.7	42	35.3	119	100.0

p&lt;0.01

表12 渡日時の身の寄せ処

		シャーサバン以外		シャーサバン		合計	
		度数	%	度数	%	度数	%
身の寄せ処	親族	6	16.7	30	83.3	36	100.0
	兄弟	6	54.5	5	45.5	11	100.0
	親族	37	94.9	2	5.1	39	100.0
	ブローカー	25	83.3	5	16.7	30	100.0
	その他	2	100.0	0	0.0	2	100.0
	合計	76	64.4	42	35.6	118	100.0

p&lt;0.01

#### < 親族ネットワーク >

親族ネットワークが滞日の拠点形成にあたってもっとも有効で、かつダイナミックに拠点形成が進んでいったのはシャーサバンである。これはいわば当たり前のことであるし、詳述するにはかなりの紙幅を要するので、シャーサバン以外の親族ネットワークの事例を紹介しておく。以下の全員の例が示すように、親族ネットワークは住居の確保には有効であるものの、必ずしも職を紹介してもらえとは限らない。(52)氏と(58)氏はブローカーに金を払って仕事を得ているし、(83)氏は91年9月に来日して仕事を得られず、92年になって友人経由で定職を得ている。

(52)氏と(58)氏の場合：従兄弟である(58)氏が先に来日した。彼は、成田についてからホテ

ルに2泊し、それから友人が代々木公園まで迎えに来て、神奈川県愛川町にある友人の家に2週間滞在した。それから、イラン人男性と日本人女性がくんでやっていたブローカーに、伊勢原の解体工事の仕事を紹介してもらった。(52)氏は、空港から上野公園に直行して(58)氏に迎えに来てもらい、厚木にある(58)氏の家に行った。それから最初の10日は自力で仕事を探したが、「仕事ありますか」という言葉だけ覚えていっても、会社の人と話す段になって言葉がわからないから、互いに疲れるだけで採用には至らなかった。そこで仕方なく、(58)氏と同じブローカーに連絡をとって紹介料を払い、清川村にある建設の仕事を始めた。

(83)氏の場合：成田空港から上野に直行し、近くにある印刷工場に住む友人の家に2泊した。しかし、仕事がないので三島に住む従兄弟の家に行き（従兄弟は3ヶ月前に来日）、1ヶ月いた。それから印刷工場に戻り、上野公園に毎日行って仕事を探した。ビザの期限が切れる年末までは、日雇いの仕事を時々やっていた。年明けの正月に、代々木公園で友人に会った際に、彼が働いている会社に連れて行ってもらって仕事を始められた。

(95)氏の場合：行く前には、入国拒否されるケースが多く難しいと聞いていた。しかし自分は金を借りて来ており、どうしてもという意気込みだった。すんなり入国が許可され、友人にビザはどこでとるのが、と聞いたらもうとれたと言われた。しかし、空港には警察がうろろうしており、空港で寝泊りしないようにしていた。最初から警察に捕まっても仕方ないので、空港を離れることにした。そこで、イラン人5人が集まってタクシーに乗り、1人100ドル渡して安いホテルに連れて行ってくれと言ったら、ラブホテルに連れて行かれた（日本にいる間、他人をだますような人はこれだけだった）。それから高尾にある従兄弟の家に行った。最初は、彼が日本に帰国する予定でその仕事を引き継ぐはずが、そうはならず4日間仕事なかった。他の友人の家に行ったら、友人の勤め先の社長が来て仕事に来るようにいった。

#### <友人ネットワーク>

友人ネットワークも、親族同様に住居の確保には役立つが、必ずしも求職ルートになっているわけではない。来日時ちょうど紹介できる職があればよいが、そうでない場合には居場所を提供することしかできない。以下で紹介する事例のうち、(86)氏以外は友人を介して仕事を見つけている。それでも、(89)氏のように最初の仕事が決まるまでに東京から大阪、愛知まで移動しなければならなかった場合もある。

(44)氏の場合：当時はイランからの直行便が非常に混雑していてとれず、マレーシアに2週間滞在し、マレーシアで日本行きの航空券をとった。そこで会った友人が、日本での行動の仕方を教えてくれた。マレーシアでは、1泊120ドル払って東京のホテルを予約したが、成田に着いたのが夜遅くで税関を出たのは終電が終わってからだった。東京に出るには、タクシー

で2万円くらいかかるというし、もったいないので空港に泊まり、朝になって上野駅に出て西川口にいた友人に電話して泊めてもらった。そこから上野公園に行って、日本人とイラン人2人組のブローカーに1~2万円払って仕事を紹介してもらった。当時は場所もわからなかったが、ずっと自動車に乗せられて栃木県の今市市まで連れて行かれた。

- (45) 氏と (55) 氏兄弟の場合：兄弟一緒に飛行機で日本に行った。3ヶ月前に渡日した近所の友人の家が秦野市にあり、そこに居候した。3週間後に、泊めてもらっていた友人が鉄工所の仕事を見つけてきた。その後、誰かを積極的に呼び寄せたことはないが、友人が2、3人来たときには仕事が見つかるまで家に泊めた。
- (74) 氏の場合：日本にいる友人が来たらどうかと勧めてくれたので、その誘いに乗って渡日することになった。元々電気修理の仕事をしているため、先進国である日本の修理には関心があった。また、最新の電気製品をみたかった。来日後、予約してあったホテルに2泊した。それから、後に日本人と結婚した友人が住んでいる高崎市に行った。修理関係で働きたいと言ったが、希望に合う職もないので、友人が別の人を介してパチンコの仕事を紹介してもらった。
- (86) 氏の場合：偶然友人が同じ飛行機に乗っていた。パスポートコントロールのところで隣のブースに並んでおり、彼が原宿までの電車の切符を買ってくれて、そこで別れた。代々木公園に行ってみたが、日曜日ではないため誰もおらず、三ノ輪の友人宅に行って15日くらい身を寄せた。イラン人ブローカーに500ドル払って、千葉の建設現場の仕事を紹介してもらった。
- (89) 氏の場合：成田空港に夜の11時頃に到着し、上野行き終電に乗った。その日は上野公園のベンチで寝て、朝になって大阪の友人のところへ新幹線で向かった。そこでは友人が仕事をパキスタン人から800ドルで仕事を紹介してもらっており、そこで働く予定だった。が、イランに妻子を残して自分より1ヶ月前に来た人がおり、友人は気の毒に思ってその人に仕事をあげてしまっていた（自分の近所から7、8人の友人が日本に行っている）。仕事がないので見つかるまで待ってくれと言われたが、小牧に住む別の友人に仕事があると言われて小牧に行った。
- (93) 氏の場合：副業でドル両替をやっていた時に、日本にこれから行く人がおり、その人が何ヶ月か後に帰国してたくさんのドルを交換していたので、自分も稼ぎに行こうと思った。成田について友人に電話し、浅草にいる友人宅まで行った。それから5日くらい友人宅で過ごし、彼が働いていた浅草のカバン工場を紹介してもらった。

友人同士の弱い紐帯であっても、連鎖移民が生じる場合もある。(70) 氏と (69) 氏は、兵役の際に知り合った友人であり、(69) 氏と (64) 氏は幼馴染であった。最初 (70) 氏が偶然得た新潟での仕事が、(69) 氏を呼び込む結果となる。(64) 氏は (69) 氏を頼って来日するが、新潟には仕事なかった。そのため、別のつてをたどって川崎で仕事を得て、(65) 氏と同じ寮に住むことになる。(65) 氏との関係で、(61) 氏らとも知り合うようになり、帰国して7年経過する調査時点で

も、毎週サッカーを楽しんでいた<sup>(18)</sup>。

- (70) 氏の場合：成田で友人を見つけ、その人の羽村市の家で過ごしたが、1週間仕事がなかった。それで成田空港に戻ったら、新発田市にある会社の社長とイラン人社員が労働者を捜しに来ていたため、仕事をやる気があるかと言われ、すぐに新潟行きのチケットを買って行った。イラン人ブローカーを通さないようにするため、直接探しに来ているのだという。自分も、この会社で働いているときに数回社長と成田空港まで行った。
- (69) 氏の場合：成田から、軍隊時代の友人である(70)氏のいる新発田に直行した(その途中、新潟駅で行き方を聞いた女性が、地元の大学教員の妻で、帰国後もメールでやりとりするような付き合いになっている)。(70)氏の紹介で、近所の肥料工場で働くことになった。
- (64) 氏の場合：鉄道会社で保線の仕事をしていたが、当時の月給は10万リアル(約100ドル)だった。今だったら鉄道の仕事で150万リアルくらいは給料があるだろうが、生活が苦しかった。(69)氏から日本行き話を聞いており、渡航費の一部も(69)氏に借りて、成田から新幹線で新発田に行った。新発田に少しいたが、仕事が見つからないので東京に出て、別の友人に自動車部品工場の溶接の仕事を探してもらった。

#### <成田空港と上野公園>

(67)氏と(68)氏の話からすると、上野公園はイラン人増加初期の頃から寝泊りや待ち合わせの場として使われていたが、当初仕事のやりとりは西日暮里駅で行われていたようである。それが上野公園でも仕事のやりとりがなされるようになり、さらに新規流入が停止してからは代々木公園へ、そこから排除されてからは各所に分散していったと考えられる。新規流入層があるときには、成田空港で客引きをする者、チラシを配る者がいた。(53)氏や(79)氏のように、つてがなくとも金さえ払えば滞在先や仕事の確保は可能だった。

(67)氏や(54)氏の例が示すように、上野公園での寝泊りは数日どころではなく数週間にのぼったケースもあった。上野公園は、(108)氏の例が示すように見知らぬもの同士での助け合いが生まれたと同時に、イラン人、日本人、パキスタン人のブローカーが仕事を持ちかける場でもある。また、仕事のやりとりは「ブローカー」だけが行っていただけではなく、(48)氏や(84)氏の例が示すように自らが転職するときには仕事を売る人たちもいた。

- (67)氏と(68)氏の場合：(67)氏と(68)氏は90年秋に渡日したが、(67)氏の方が1週間早く日本に着いている。2人で示し合わせて来日したわけではないが、(68)氏がいつ成田に来るかは知っていた。(67)氏は、成田に着いたときにはまったくつてがなく、遅い時間帯で空港にいた。夜は空港から出されるため、駅の裏で寝た。そこで知らないイラン人が、仕事があるからとバスで迎えに来て、アパートに連れて行かれた。そこで一泊し、朝になった

- ら誰かがノックするので開けると、その会社の社長であったが、人はいらないと追い出された。仕方なく上野公園に行き、数日は公園でイランから持ってきたピスタチオとクルミ、それに安かったバナナばかり食べていた。数日すぎて(68)氏が到着したので、空港まで迎えに行った。それから2人で西日暮里駅に行き、パキスタン人ブローカーに仕事を斡旋してもらった。当時、仕事のやり取りは西日暮里駅で行われており、上野公園が使われるようになったのはそれから数ヶ月してからだという。
- (54) 氏の場合：日本に行くときには、ひげがあると入国できないと話を聞いて剃った。友人もあらず、噂だけを聞いて神頼みで日本に行った。そのため、成田空港で最初の何日かは寝泊まりした。その後、2週間は公園で寝泊まりして仕事を探した。結局、他のイラン人に金を払って最初の建築現場の仕事を紹介してもらった。
- (108) 氏の場合：航空券90万リアルに加えて、2000ドルを持っていった。兄の友人に借りて、利子を付けて日本から送って返した。成田から上野公園に行った。そこで知らないイラン人と話して、彼の家に泊めてもらった。それからいろいろ友人の家に泊めてもらい、1ヶ月後に、友人が働いていた仕事を紹介してもらった。
- (53) 氏の場合：電気店で働いており、日本の電気製品を扱っていた。こういう製品を作る日本という国が気になっていたもので、ずっと日本のことが好きだった。若い人が皆日本に行くという話を聞いて、ぜひ行ってみたいと思って友人と一緒に渡日した。日本でのはなかつたが、成田空港で知らないイラン人に声をかけられ、その場で200ドル払って1泊だけ彼が連れて行ったアパートに滞在し、そこで千葉県旭市にある食肉加工工場の仕事を紹介された。
- (79) 氏の場合：戦争後イランに仕事がなく、日本に行った人の話をきいて、面白いと思っていくことに決めた。幼馴染の近所の友人4人で一緒に渡航した。成田から別の友人に電話をしたがいなかった。そのため、空港で会ったパキスタン人ブローカーに400ドルで仕事を紹介してもらった。
- (48) 氏の場合：友人に話を聞いて、日本はいいところだと聞いて行った。貯蓄してビジネスを拡大しようと思っていた。バザールで布の卸売りをしていたが、店は賃貸だったので、店を閉めて行った。日本に誰も知り合いがない状態で渡日し、上野公園などで仕事を探すなかで友人を作っていた。最初の仕事も、上野公園で自分の仕事をやめる際に売りに来た人から買って、長野で旋盤工として始まった。
- (84) 氏の場合：成田空港から上野公園に直行したが、仕事が見つからず夜になって近くの3人1部屋のような安宿に泊まった。そこにはイラン人が16人いた。2日目に上野公園で400ドル払って仕事を見つけた。自分も仕事を辞めるときには自分の仕事を人に売ったから、払った分は取り返している。

## 6. 結語に代えて

イランでの調査データに基づいて、渡日イラン人のプロフィールと渡日の経緯を中心に、データ開示と簡単な考察を行ってきた。稿を閉じるにあたって、日本での就労・生活経験や帰国の経緯・帰国後の経験の考察につなげるためにも、これまでの知見をまとめて渡日イラン人の実像を確認しておくこととしたい。

まず、階層的にみると渡日イラン人は決して高い部類に属するとはいえない。専門職、事務職の比率は1割未満にとどまる。また、バザールを中心的な調査地としたにもかかわらず、自営業者が多数派ではなかった。むしろ、製造、運輸、保安関係の業務に就く者が多く、本稿のデータではブルーカラー層が出稼ぎ者の中心だったといえる。その意味で、中間層の流出としてイラン人の日本出稼ぎを性格づけることは難しいだろう。ただし、そうであっても4分の3の者が渡航費を自己負担しており、その程度の余裕がある層が来日しているといえる。90～92年にかけて、イランの通貨リアル対ドルレートが現在の6～8倍だったとはいえ、数千ドルを負担するのは容易ではない。そうした意味では、「中の下」が中心とはいえ生活苦にあえぐ下層が渡日したわけではない。

そして年齢層をみると、未婚の若者が中心であり、それに短期滞在の既婚者が加わるといった形になる。既婚者と未婚者の滞日期间には有意な差があり、イラン人超過滞在者数が急速に減少した背景の1つとして既婚者の帰国が指摘できる。既婚者についてみれば、ライフコース上の変化もない短期の出稼ぎであった一方、5年以上滞在した若年層については帰国後の再適応も含め長期的な影響があった。この点については、稿を改めて論じたい。

最後に、渡日のネットワークについていえば、日本に知己がある者はさしあたりの住居を確保できる点は有利だといえる。ただし、90年の後半にはつてを持たず渡日しても、金を払えば住居や職を得る仕組みはできあがっていた。それが成田空港、西日暮里駅や上野公園、後の代々木公園での仕事バザールの形成である。

こうしたバザールへの利用層と集う目的は、大きく3つに分けられる。第1は、すでに職についており、待ち合わせと交歓のために集う層である。第2は、誰かの住居には住んでいるが、職が無いあるいは転職したいため、仕事の情報を求めて（あるいは仕事の情報を売りに）集う層である。第3は、ネットワークを持たず来日し、職も住居もなくしばらく寝泊りの場として使用する層である。この層は、上野公園にしか該当しないし、仕事が見つかるまでの短期間しか滞在しないとしても、イラン人イメージの形成にはかなりのインパクトを持っていた。

付表：インタビュー回答者のプロフィール<sup>(19)</sup>

エスニシティ	出生年	渡日時 學歷	婚姻	生地	来日前居住地	現住地	来日前職	来日年	帰国年	滞日期間	渡航 回数	来日時家 族・親族
1 シャーサバン	1967	高校卒	帰国後	アフマッドルー	ロバートカリム	ロバートカリム	工場労働	1991	2000	9年	1	従兄弟
2 シャーサバン	1961	中学卒	来日前	アフマッドルー	テヘラン	イスラムシャー	自営(トラック)	1991	1992	2年	1	弟
3 シャーサバン	1971	高校卒	帰国後	テヘラン	イスラムシャー	イスラムシャー	兵役	1991	1993	2年半	1	兄
4 シャーサバン	1966	高校卒	帰国後	アフマッドルー	アフマッドルー	イスラムシャー	農業	1991	1994	2年半	1	弟
5 シャーサバン	1965	高校卒	帰国後	アフマッドルー	アフマッドルー	ロバートカリム	農業	1991	1992	13ヶ月	1	従兄弟
6 シャーサバン	1967	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	イスラムシャー	非常勤教員	1990	1991	13ヶ月	1	親族多数
7 シャーサバン	1964	高校卒	帰国後	アフマッドルー	ゴム	イスラムシャー	自営(飼料販売)	1991	1994	3年	1	兄
8 シャーサバン	1966	高校卒	来日前	アフマッドルー	バランダック	バランダック	自営(バス)	1991	1991	6ヶ月	1	親族多数
9 シャーサバン	1956	高校卒	未婚	アフマッドルー	バランダック	バランダック	自営(建築資材・食品卸売)	1991	1997	6年	1	親族多数
10 シャーサバン	1958	中学卒	来日前	アフマッドルー	イスラムシャー	イスラムシャー	空港職員	1991	1991	3ヶ月	1	親族多数
11 シャーサバン	1966	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	ロバートカリム	自営(貿易)	1990	1993	2年半	1	従兄弟
12 シャーサバン	1968	高校卒	帰国後	アフマッドルー	ゴム	ゴム	兵役	1991	1997	6年	1	親族多数
13 シャーサバン	1967	高校卒	帰国後	アフマッドルー	ゴム	ゴム	農業	1991	1993	2年	1	親族多数
14 シャーサバン	1963	中学卒	来日前	アフマッドルー	ゴム	ゴム	自営(給水)	1991	1994	3年	1	兄
15 シャーサバン	1957	中学卒	来日前	アフマッドルー	ゴム	ゴム	自営(建築資材運搬)	1991	1993	2年	1	弟
16 シャーサバン	1958	高校卒	来日前	アフマッドルー	ゴム	ゴム	自営(飲食店)	1990	1992	2年	1	親族多数
17 シャーサバン	1965	高校卒	帰国後	アフマッドルー	テヘラン	ロバートカリム	失業	1992	1992	1年	1	親族多数
18 シャーサバン	1967	高校卒	帰国後	アフマッドルー	ロバートカリム	ロバートカリム	兵役	1991	1993	1年半	1	親族多数
19 シャーサバン	1961	高校卒	来日前	アフマッドルー	アフマッドルー	ロバートカリム	農業	1990	1991	9ヶ月	1	親族多数
20 シャーサバン	1957	高校卒	来日前	アフマッドルー	テヘラン	テヘラン	自営(肉屋)	1990	1993	21ヶ月	2	親族多数
21 シャーサバン	1970	中学卒	未婚	カラジ	テヘラン	テヘラン	被雇用者(溶接工)	1991	1993	1年半	1	親族多数
22 シャーサバン	1968	高校卒	未婚	テヘラン	イスラムシャー	イスラムシャー	金製品店員	1991	2004	12年半	1	親族多数
23 シャーサバン	1968	高校中退	未婚	アフマッドルー	バランダック	バランダック	家業(不動産)手伝い	1991	2004	12年	1	親族多数
24 シャーサバン	1970	高校卒	帰国後	アフマッドルー	ロバートカリム	ロバートカリム	兵役	1991	1992	1年半	1	従兄弟

エスニシティ	出生年	渡日時 学歴	婚姻	生地	来日前居住地	現住地	来日前職	来日年	帰国年	滞日期間	渡航 回数	来日時家 族・親族
25 シャーサバン	1957	中学卒	来日前	アフマッドルー	テハラ	ロバートカリム	自営(薬品製造)	1990	1990	3ヶ月	1	従兄弟
26 シャーサバン	1967	高校卒	帰国後	テハラ	テハラ	イスラムシャー	被雇用者(溶接工)	1991	1996	5年	1	兄
27 シャーサバン	1965	高校卒	帰国後	テハラ	テハラ	イスラムシャー	自営(靴製造)	1991	1996	5年半	1	弟
28 シャーサバン	1970	高校卒	未婚	テハラ	テハラ	テハラ	被雇用者(細かい仕事を いくつか)	1992	2001	9年	1	従兄弟
29 シャーサバン	1966	高校卒	帰国後	フアリアバッド	テハラ	イスラムシャー	被雇用者(バス運転手)	1990	1993	3年	1	親族多数
30 シャーサバン	1966	高校卒	来日前	サーベ	テハラ	イスラムシャー	被雇用者(工場労働)	1990	1992	18ヶ月	1	親族多数
31 シャーサバン	1954	小学校卒	来日前	インジエリ	イスラムシャー	ヴァーヴアン	自営(運転手)	1991	1991	8ヶ月	1	親族多数
32 シャーサバン	1947	小学校卒	来日前	ラズカ	テハラ	イスラムシャー	被雇用者(鉄道会社の保線係)	1991	1992	16ヶ月	1	親族多数
33 シャーサバン	1962	高校卒	帰国後	アリアバッド	ゴム	ゴム	家業(製本)手伝い	1991	1997	7年	1	親族多数
34 シャーサバン	1951	小学校卒	来日前	アリアバッド	ロバートカリム	ロバートカリム	自営(トラック)	1991	1994	2年	1	従兄弟
35 シャーサバン	1966	高校卒	来日前	テハラ	テハラ	テハラ	家業(牧場)手伝い	1991	1992	17ヶ月	1	従兄弟
36 シャーサバン	1962	中学卒	帰国後	アリアバッド	アリアバッド	カラジ	被雇用者(レストラン)	1991	1998	7年	1	従兄弟
37 シャーサバン	1969	高校卒	帰国後	アフマッドルー	テハラ	イスラムシャー	兵役	1991	1993	2年半	1	従兄弟
38 シャーサバン	1971	高校卒	未婚	メディアバッド	テハラ	イスラムシャー	兵役	1990	1994	4年半	1	叔父
39 シャーサバン	1969	高校卒	未婚	テハラ	テハラ	テハラ	家業(バス運転)手伝い	1990	1996	6年	1	兄
40 シャーサバン	1970	高校中退	帰国後	スハイ	テハラ	イスラムシャー	兵役	1991	1993	20ヶ月	1	兄
41 シャーサバン	1962	小学校卒	来日前	スハイ	テハラ	テハラ	家業(金属回収)手伝い	1991	1993	21ヶ月	1	弟
42 トルコ系	1956	高校卒	来日前	テハラ	テハラ	イスラムシャー	工場経営	1991	1993	20ヶ月	1	従兄弟
43 ペルシヤ系	1954	小学校卒	来日前	ハメダーン	テハラ	イスラムシャー	自営(建設)	1991	1991	10ヶ月	1	従兄弟
44 トルコ系	1965	高校卒	帰国後	テハラ	テハラ	テハラ	自営(養鶏)	1991	1999	8年	1	なし
45 ペルシヤ系	1963	高校卒	帰国後	テハラ	テハラ	テハラ	被雇用者(修理工)	1991	1994	3年	1	兄
46 トルコ系	1965	高校卒	来日前	テハラ	テハラ	テハラ	家業手伝い(靴屋)	1992	1992	8ヶ月	1	従兄弟
47 ペルシヤ系	1969	中学卒	帰国後	テハラ	テハラ	テハラ	家業手伝い(服屋)	1990	1999	9年	1	なし

	エスニシティ	出生年	渡日時 學歷	婚姻	生地	来日前居住地	現住地	来日前職	来日年	帰国年	滞日期間	渡航 回数	来日時家 族・親族
48	トルコ系	1963	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	テヘラン	自営 (布問屋)	1991	1993	2年	1	なし
49	ペルシヤ系	1963	中学卒	来日前	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (スプーン店員)	1989	1991	14ヶ月	2	なし
50	ペルシヤ系	1969	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (洋服店員)	1991	2000	9年	1	兄2人
51	ペルシヤ系	1966	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	家業 (自動車用品販売) 手伝い	1990	1992	17ヶ月	1	なし
52	ペルシヤ系	1970	高校卒	帰国後	マシュハド	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (縫製工場)	1990	1993	3年	1	兄
53	父ペルシヤ母トルコ	1961	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	家業手伝い (電気店)	1990	1995	5年	1	なし
54	ペルシヤ系	1967	中学中退	来日前	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (空港職員)	1991	1991	6ヶ月	1	なし
55	ペルシヤ系	1961	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (バイク部品店員)	1992	1998	6年	1	弟
56	ペルシヤ系	1971	高校中退	未婚	テヘラン	テヘラン	テヘラン	兵役	1991	2001	10年	1	なし
57	ペルシヤ系	1966	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	両替	1990	1994	3年半	1	なし
58	ペルシヤ系	1965	高校卒	帰国後	マシュハド	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (機械製造)	1991	1998	7年	1	なし
59	ペルシヤ母トルコ	1965	高校卒	滞日中	テヘラン	テヘラン	テヘラン	家業 (縫製) 手伝い	1991	1994	3年	1	兄弟
60	父ペルシヤ母トルコ	1967	高校中退	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (石油会社勤務)	1990	1996	6年	1	なし
61	父ペルシヤ母ロシア	1965	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (自動車部品店員)	1991	1996	5年	1	なし
62	不明	1968	不明	帰国後	不明	不明	テヘラン	不明	1989	1994	5年	3	不明
63	アラブ系	1968	高校卒	未婚	アフヴァーズ	アフヴァーズ	アフヴァーズ	被雇用者 (製鉄会社)	1990	1993	3年	2	甥
64	ペルシヤ系	1966	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (鉄道会社の営繕)	1990	1995	5年	1	なし
65	トルコ系	1966	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (電話局)	1991	1997	6年	1	従兄弟
66	ペルシヤ母トルコ	1962	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (縫製工場)	1991	2000	9年	1	従兄弟
67	トルコ系	1962	小学校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (鉄道公社)	1990	1994	3年半	1	なし
68	ペルシヤ系	1961	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (電柱製造)	1990	2001	10年半	1	従兄弟
69	トルコ系	1966	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	家業 (製菓) 手伝い	1990	1994	4年半	1	弟
70	トルコ系	1967	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	被雇用者 (自動車整備)	1990	1999	9年	1	従兄弟
71	ペルシヤ系	1964	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	テヘラン	両替	1992	1992	6ヶ月	1	なし

エスニシティ	出生年	渡日時 学歴	婚姻	生地	来日前居住地	現住地	来日前職	来日年	帰国年	滞日期間	渡航 回数	来日時家 族・親族
72	ベルシヤ系	1968	中学卒	未婚	テヘラン	テヘラン	被雇用者(布問屋)	1992	1999	7年	1	なし
73	トルコ系	1968	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	家業(布屋)手伝い	1991	2000	9年	1	なし
74	トルコ系	1964	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	被雇用者(電気修理)	1991	1992	16ヶ月	1	なし
75	ベルシヤ系	1960	専門学校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	被雇用者(電気店)	1990	1994	4年	1	なし
76	トルコ系	1968	高校卒	帰国後	タフレシユ	イスラムシャー	自営(電気修理)	1990	1993	3年	1	なし
77	トルコ系	1969	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	被雇用者(石油会社)	1990	1993	3年	1	妻の叔父
78	不明	不明	高校卒	未婚	サーベ	サーベ	兵役	1990	2001	11年	1	なし
79	トルコ系	1964	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	自営(配線)	1990	1993	3年	1	兄弟
80	トルコ系	1965	中学卒	来日前	カラジ	カラジ	被雇用者(靴卸売)	1991	1993	2年	1	親族2人
81	ベルシヤ系	1961	中学卒	来日前	カラジ	カラジ	家業(溶接)手伝い	1990	1991	1年	1	兄
82	ベルシヤ系	1966	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	被雇用者(靴製造)	1990	2003	13年	1	なし
83	ベルシヤ系	1970	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	無職	1991	2002	11年	1	弟
84	トルコ系	1959	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	被雇用者(靴製造)	1992	1993	9ヶ月	1	なし
85	トルコ系	1961	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	兵役	1990	1993	7ヶ月	3	弟
86	ベルシヤ系	1968	高校中退	来日前	テヘラン	テヘラン	高替	1991	1992	10ヶ月	1	従兄弟
87	クルド系	1961	高校卒	未婚	ケルマーンシャー	テヘラン	被雇用者(自動車部品製造)	1991	1992	1年	1	なし
88	ベルシヤ系	1967	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	家業(雑貨店)手伝い	1990	1998	8年	1	なし
89	ベルシヤ系	1968	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	金製品店員	1991	1993	2年	1	従兄弟
90	ベルシヤ系	1951	中学卒	来日前	ハメダーン	テヘラン	自営(縫製)	1991	1994	3年	1	義弟
91	ベルシヤ系	1964	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	被雇用者(金製品店員)	1990	1995	5年	1	兄弟
92	父ロシア母ベルシヤ	1966	大学中退	帰国後	テヘラン	テヘラン	被雇用者(紙加工)	1989	1992	3年	1	従兄弟
93	ベルシヤ系	1971	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	学生	1990	1995	5年	1	なし
94	ベルシヤ系	1959	中学卒	来日前	テヘラン	テヘラン	被雇用者(倉庫会社)	1991	1993	2年	1	甥
95	トルコ系	1966	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	兵役(志願兵)	1991	1994	3年	1	従兄弟

エスニシティ	出生年	渡日時 学歴	婚姻	生地	来日前居住地	現住地	来日前職	来日年	帰国年	滞日期間	渡航 回数	来日時家 族・親族
96	ベルシヤ系	1949	中学卒	来日前	テヘラン	テヘラン	金製品店員	1990	1993	3年	2	なし
97	ベルシヤ系	1962	高校中退	帰国後	テヘラン	テヘラン	両替	1992	1995	2年半	1	なし
98	クルド系	1969	高校卒	来日前	イラーーム	テヘラン	貿易	1991	1993	2年	1	なし
99	ベルシヤ系	1958	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	両替	1992	1997	5年	1	なし
100	ベルシヤ系	1968	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	兵役	1990	1993	3年	1	なし
101	ベルシヤ系	1963	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	石油会社勤務	1991	1993	2年	1	なし
102	ベルシヤ系	1964	高校中退	帰国後	テヘラン	テヘラン	両替	1989	1992	2年半	2	連れ親戚
103	ベルシヤ系	1969	高校中退	帰国後	テヘラン	テヘラン	兵役	1990	1995	4年半	1	兄
104	トルコ系	1969	大学中退	帰国後	テヘラン	テヘラン	学生	1990	1992	1年半	1	親族多数
105	トルコ系	1963	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	両替	1991	1993	2年	1	弟
106	ベルシヤ系	1969	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	兵役	1992	1999	7年	1	兄
107	ベルシヤ系	1970	高校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	兵役	1990	1993	3年	1	なし
108	ベルシヤ系	1965	高校中退	未婚	テヘラン	テヘラン	服店員	1992	2002	10年	1	なし
109	父トルコ母ベルシヤ	1967	専門学校卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	兵役	1990	1990	9ヶ月	1	従兄弟
110	ベルシヤ系	1962	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	家業(バイク修理)手伝い	1990	1993	3年	1	従兄弟
111	ベルシヤ系	1960	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	自営(中古車売買)	1990	1995	4年半	2	なし
112	トルコ系	1959	高校卒	来日前	ザンジャン	テヘラン	被雇用者(繊維製造)	1991	1992	15ヶ月	1	なし
113	ベルシヤ系	1961	中学卒	帰国後	テヘラン	テヘラン	被雇用者(スプーン店員)	1989	1992	14ヶ月	2	義兄
114	ベルシヤ系	1963	高校卒	未婚	テヘラン	テヘラン	被雇用者(溶接工)	1991	1999	8年	1	なし
115	ベルシヤ系	1961	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	被雇用者(農業)	1991	1993	2年	1	なし
116	トルコ系	1962	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	自営(バイク部品販売)	1989	1990	11ヶ月	1	なし
117	トルコ系	1962	中学卒	来日前	テヘラン	テヘラン	自営(バイク部品販売)	1990	1990	4ヶ月	1	従兄弟
118	ベルシヤ系	1964	高校卒	来日前	テヘラン	テヘラン	自営(バイク部品店)	1990	1996	6年	1	兄
119	トルコ系	1964	高校卒	未婚	アルダビール	テヘラン	自営(靴下製造)	1991	1995	3年3ヶ月	1	なし

120	エスニシナイ ベルシヤ系	出生年 1965	渡日時 学歴 大学中退	婚姻 未婚	生地 テヘラン	来日前居住地 テヘラン	現住地 テヘラン	来日前職 市役所勤務	来日年 1990	帰国年 1991	滞日期間 15ヶ月	渡航 回数 2	来日時家 族・親族 なし
-----	-----------------	-------------	-------------------	----------	------------	----------------	-------------	---------------	-------------	-------------	--------------	---------------	--------------------

注：複数回来日している場合、来日年と帰国年は最初の来日と最後の帰国を示す。滞日期間は、複数回の合計を示すものとする。

- 
- (1) この点については、倉 (2000) を参照。
  - (2) このうち後二者については該当する記事を引用しておく (名前は伏せた)。「東京都葛飾区小菅 1 丁目の東京拘置所で12日午前 3 時20分ごろ、収監されていたイラン人の未決囚 7 人が集団で脱走、警視庁亀有署などで行方を追っている。同拘置所からの脱走は1955年 5 月以来、約40年ぶりという。東京拘置所によると、7 人は24歳から39歳の男性。覚せい剤取締法や出入国管理・難民認定法違反などの罪で、昨年 5 月から今年 1 月にかけて収監され、「北舎」1 階の同じ雑居房に入っていた。調べでは、雑居房の窓の鉄格子 1 本 (直径約 2 センチ) を金切りノコのような物で切断して屋外へ出た。中庭の工事現場にあった鉄パイプ 2 本に鉄筋 7 本などを横に渡したはしご状の足場を作り、高さ 5 メートルの内堀を乗り越え、さらに同じ足場を使って高さ 5.5 メートルある外堀も乗り越えたという。足場は外堀に立てかけたまま残っていた。鉄パイプ 2 本は長さ 4 メートルほどで、長さ 2 メートルの木材が継ぎ足してあった。拘置所近くを流れる綾瀬川にかかる橋の下に、イラン人が着ていたジャージなどが脱ぎ捨ててあるのが見つかった。同署は外部から手助けした人間がいる可能性もあると見ている」(『朝日新聞』1996年 2 月13日)。「警視庁は 23 日、製薬メーカーの栄養ドリンクのCMでSMAPのメンバーと共演するなど、独特のキャラクターで人気を得ていたイラン国籍の × × こと 容疑者 (35) = 東京都板橋区徳丸 1 丁目 = を出入国管理法違反 (不法残留) 容疑で逮捕した。高島平署の調べによると、容疑者は91年 2 月 28 日、観光目的で入国したが、90日間の滞在期間にもかかわらず在留期間の更新や変更をしないまま、11年余にわたり不法残留していた疑い。同容疑者は、田辺製薬のアスパラドリンクのCMに出演していた。同社のホームページなどによると、容疑者はボディービルダーとして大会で入賞するなど活躍。『ハニホー・ヘニハー』という芸名で99年から栄養ドリンクのCMに出演し、『1 本いっとく』というキャッチフレーズと独特の容姿で人気を得ていた。CMではSMAPのメンバーと共演し、日本の映画にも出演したことがある」(『朝日新聞』2002年 7 月23日)。
  - (3) いわゆるニューカマーでは、南米出身者に関する研究が圧倒的に多く、フィリピン人、中国人がそれに次ぐ。人口規模の大きさを反映するともいえるが、ビザを持った「アプローチしやすい」グループに偏っているともいいうるだろう。そうした状況のなかで、超過滞在の男性労働者のうちではイラン人に関する文献は多い部類に属する (倉 1995a, 2000; 町村 1998; 森田 2003; 岡田 1998; 丹野 1998; 東京大学医学部保健社会学研究室 1990; 筑波大学社会学研究室 1994; Yamagishi and Morita 2002)。
  - (4) 本稿の渡日編に引き続いて、滞日編と離日編を現在準備中であり、順次発表していきたい。また、こうした視点はバングラデシュ人についてすでに部分的に展開している (樋口・稲葉 2003, 2004; 稲葉・樋口 2003)。
  - (5) ヨーロッパやトルコなど他の国の偽造パスポートにより来日する者も、いないわけではない。しかし、退去強制の統計をみる限りそうした者は数的に無視できる程度といってよい。

- (6) 超過滞在者の統計では、おおむね3000人以上の国籍以外は「その他」として扱われる。
- (7) 外国人登録証に「滞在資格なし」と書かれても身分証明代わりになる、警察に登録するように言われたといった理由により、超過滞在者の一定割合は市町村窓口へ赴いて外国人登録を行っている。
- (8) (1)氏が2003年にはテヘラン近郊のロバートカリムに、2004年には同じく近郊のイスラムシャーに住んでいたことなどにより、テヘラン以外でインタビューを行ったものが過半数に達する。
- (9) シャーサバンの出稼ぎに関しては、来日以前の歴史や渡日・滞日の際の親族ネットワークの機能など、興味深い論点が多々存在する。この点については、稿を改めて論じたい。予備的な紹介については、稲葉・樋口（2005）で行っている。
- (10) このうち（61）～（65）と（66）～（70）は、樋口・稲葉・丹野・樋口（2004）で紹介した不動産開発グループとその友人である。
- (11) 煩雑さを避けるために、以下の表ではすべてNA/DKを除いた結果を示している。
- (12) 父親と母親のエスニシティが異なる場合があるが（付表参照）、本稿では父親のエスニシティを基準にしている。
- (13) これは、聞き取りの際にもイラン人の間で流布する言説として語られることが何度もあった。特に、テヘラン中央駅の南側にあるジャヴァディエ地区が、もっとも多く出稼ぎ者を輩出しているという。ジャヴァディエはテヘランでも治安が悪い地区といわれており、「日本で犯罪をやっているのはジャヴァディエ出身者が多い」と話す回答者も多かった。
- (14) 我々が調査を行ったのは、図4に示したようにテヘランではほとんどがバザールであったため、サンプリングに偏りがあることは否定できない。「渡日イラン人中のトルコ系比率」を正確にみることはできないが、バザール周辺部から渡日したトルコ系が一定比率存在したとはいえるだろう。
- (15) テヘラン近郊とは、テヘラン西隣のカラジ、南西のイスラムシャー、ロバートカリム、ワーワンになる。
- (16) このように多くがアフマッドルーから出て行った結果、現在のアフマッドルーには7家族しか住んでいない。残された者は、牧畜やザクロ、ピスタチオ栽培に従事している。
- (17) いろいろな人の多様なエピソードを聞けるのが、移民研究の魅力の1つだろう。調査を進める中で、食事に呼んでくれる人が多かったため、ごく一部の人の家にしか行けなかったが、(59)氏の話聞いて招待を断ることはできなかった。筆者（樋口）より3歳上でしかない彼は、すでに髪の毛が真っ白だった。テヘランの下町にある彼の家は、外見よりは快適そうにみえたが、階層的には「中の下」くらいに当たるだろう。そこで大量のケバブを用意してくれた厚情に感謝するとともに、日曜日にまで働いた貯蓄を無にしてしまった彼の労苦を紹介しておきたい。
- (18) (65)氏は、樋口・稲葉・丹野・樋口（2004）で紹介した不動産投資グループAの一員であり、グループBとは日本で知り合って現在でもサッカー仲間として付き合い合っている。

(19) このプロフィールは、本稿と関係ある項目だけを挙げている。他の項目については、別稿で順次報告していきたい。

## 文献

樋口直人・稲葉奈々子, 2003, 「滞日バングラデシュ人労働者・出稼ぎの帰結——帰還移民50人への聞き取りを通じて」『茨城大学地域総合研究所年報』36号.

———, 2004, 「マージナル化か、ニッチ形成か——滞日バングラデシュ人の労働市場, 1985-2001」『茨城大学地域総合研究所年報』37号.

樋口里華・稲葉奈々子・丹野清人・樋口直人, 2004, 「ネットワークは国境を越えて——帰国したイラン人労働者が不動産開発を始めるまで」『九州国際大学国際商学論集』15巻3号.

稲葉奈々子・樋口直人, 2003, 「滞日バングラデシュ人労働者の職業経歴」『コミュニケーション学科論集』14号.

———, 2005, 「滞日イラン人と親族ネットワークのダイナミズム——トルコ系シャーサバンにみる新しい遊牧のかたち」関東社会学会報告.

稲上毅, 1992, 「経営戦略・外国人労働市場・雇用管理——事例からみたスペクトラム構造」稲上毅ほか『外国人労働者を戦力化する中小企業』中小企業リサーチセンター.

駒井洋, 1999, 『日本の外国人移民』明石書店.

倉真一, 1995a, 「景気後退下における在日イラン人——出身階級・生活機会およびその獲得戦略を中心に」『年報社会学論集』8号.

———, 1995b, 「定住化のなかの就労——外国人労働者から定住外国人へ」駒井洋編『定住化する外国人』明石書店.

———, 2000, 「外国人のイメージ——日本のマスメディアにおけるイラン人を事例に」『宮崎公立大学人文学部紀要』8巻1号.

町村敬志, 1999, 「グローバル化と都市——なぜイラン人はたまり場を作ったのか」奥田道大編『講座社会学 都市』東京大学出版会.

森田典子, 2003, 「移住者によるネットワークの形成と崩壊——イラン人帰国者へのインタビュー調査より」岩崎信彦他編『日本の外国人, 外国の日本人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂.

岡田恵美子, 1998, 『隣のイラン人』平凡社.

丹野清人, 1998, 「創り出される労働市場——非合法就労者の移動のメカニズム」『大原社会問題研究所雑誌』478号.

東京大学医学部保健社会学科研究室, 1992, 『上野の町とイラン人——摩擦と共生』.

筑波大学社会学研究室, 1994, 『在日イラン人——景気後退下における生活と就労』.

Yamagishi, T. and T. Morita, 2002, *The Iranian Experience of Japan through Narratives*,

Islamic Area Studies Working Paper Series, Tokyo: Islamic Area Studies Project.

(付記) 調査にあたって研究の意義を認めてくれ、インタビューに長時間お答えいただいた方々に深く感謝したい。本稿は、九州国際大学共同研究費と科学研究費による研究成果である。